

昭和の日本画と洋画⁽¹⁸⁹⁴⁻¹⁹⁸⁹⁾ 松岡翁 晩年の眼力

2023年10/24(火) - 2024年2/11(日) 松岡美術館

各種の団体展を訪ねては新作と対峙した晩年の松岡清次郎（当館創設者）。所蔵する昭和後期の絵画は、彼の求めた理想の絵画が集結したコレクションです。その蒐集のきっかけは76歳（1970・昭和45年）の時に、美術大学受験のための予備校を開校したことでした。これが刺激となって、“まさに今描かれる日本の絵画”に関心を持つようになり、毎年秋に開催される日展、院展をはじめ、創画展、二紀展などの団体が主催する多くの公募展に1970年代から足しげく通うようになりました。経営者の責務を担い、国内の売り立てや海外オークションへの参加という多忙なスケジュールに、重ねた齢も何のその。数々の美術品に接して鍛えた眼力で、会場を巡って熱心に選んだ作品数は日本画、洋画あわせて300点に迫ります。今展では1974(昭和49)年から1988(昭和63)年に最晩年の清次郎が選んだ日本画10点(12/12(火)から1点追加)、洋画18点を出品いたします。

日本画 12 点

展示室 5

I. 第8回創画展

このケースの作品は、1981（昭和56）年の第8回創画展で得られたものです。この時の陳列数は171点。その中から清次郎が選んだ5作品のうち、今回は3点を展示しています。広大な自然を描いた信太金昌（作品No.1）は病床の恩人が海外へと去っていく寂寥感を夏から冬へと移ろいゆく季節に込め、烏頭尾精（作品No.2）は両親が眠る丘陵の上を飛ぶ鳥に残された家族の想いを託しました。そして毎年正月二十日の夜祭に奉納される延年の舞を壮大なスケール感をもってあらわしたのは大森運夫（作品No.3）です。寺僧自らが寿命長久を祝福して演じる峻厳な動きと、篝火に照らし出された民衆の表情が迫真的に描かれています。

1	信太金昌 《聴秋悲夏》	1981(昭和56)年	第8回創画展	紙本着色	163×230
2	烏頭尾精 《上居への道》	1981(昭和56)年	第8回創画展	紙本着色	162×227
3	大森運夫 《伝承・浄夜 毛越寺》二面	1981(昭和56)年	第8回創画展	紙本着色	各160×259

床の間

12/10日まで

4	小室翠雲 《秋月銀波図》	1917(大正6)年		紙本墨画淡彩	145.2×41.1
5	川瀬竹春 釉裏紅花文大皿	1981(昭和56)年			高9.0 径46.5

12/12火より

4	小室翠雲 《朝陽海波図》	1917(大正6)年		紙本墨画淡彩	145.2×41.3
5	郷倉和子 《霧の中から》二曲一隻	1979(昭和54)年	再興第64回院展	紙本着色	180.5×213

II. 昭和57年から61年のコレクションより

1984（昭和59）年、90歳になった清次郎は、このころ年に3~4度は海外オークションに出かけ中国陶磁やフランス近代絵画を求めていました。中国の《三彩大壺》やユトリロ《オルテーズのサン＝ピエール教会》を取得したと同じ1983年の創画展に出品されていた橋本龍美《雪ん中》（作品No.8）は、故郷と決別して

画家となった龍美が、己の原点に回帰して故郷に根差したモチーフを描き出した頃の作品。細部の描き込みと全体の構成が巧みな調和を見せています。雪に閉ざされた冬の暮らし、女たちの手仕事。雪女が天空を覆い、キツネが跳梁する厳しくも豊かな自然。これらは、故郷の思い出や幼い頃に親しんだ夜噺が混じり合った独自の世界であり、家屋の内外を探検するような面白さにあふれます。「望郷の画家」と冠して、2023年4月に新潟県立近代美術館で龍美の大規模な回顧展が催されました。独学で絵を描き、話題の人となってもハングリー精神を失わない龍美の生き方は、清次郎の「独自路線を貫く精神」と重なるところがあるようです。また、1983年に院展で取得した入江正巳《龍門煙雨》(作品No.9)は、当館では今回が初出品となります。このように展示スペースの制約などで未だご紹介できずにいる作品があります。

6	濱田 観	《初夏》	1982 (昭和 57)年	第 14 回日展	紙本着色	65.5×80
7	小笠原 光	《早春》	1982 (昭和 57)年	第 37 回春の院展	紙本着色	134.5×68.4
8	橋本龍美	《雪ん中》	1983 (昭和 58)年	第 10 回創画展	紙本着色	145×214
9	入江正巳	《龍門煙雨》	1983 (昭和 58)年	再興第 68 回院展	紙本着色	157×215
10	中島千波	《眠* '86-8》	1986 (昭和 61)年	再興第 71 回院展	紙本着色	160×220

中島千波《眠* '86-8》(作品No.10)は、安らかなムードや柔和な色調にまず目を奪われますが、さりげなく配置されたモチーフと線描の確かさが際立ち、『再興第 71 回院展全作品集』には清次郎の三重丸が書き込まれました。「眠」は、「衆生」や「形態」に続く千波の人間シリーズのひとつ。社会運動や戦争の原因といった、千波が学生時代から抱いていた問題意識が「人間とはいったい何だろうか」という興味に変化し、現在もテーマを変えながら人物を探究しています。実は、色や形、構成にこだわった「形態」シリーズが評価されず、“ふて寝”をしてしまおうと始まったのがこの「眠」シリーズ。ですが、「一生の三分の一は眠っているわけで、生き物にとって大切な意味があり、目を閉じてこそ見える世界がある」と考え、その表現を目指しました。愛犬ロッキーも眠る本作は「眠」シリーズのごく初期のもので、後に「横の会」や「目展」、「Artist Group-風-」を結成し自由な活動を続ける千波が院展に出品していた時期の作品です。

11	山本真也	《枯野》	1986 (昭和 61)年	再興第 71 回院展	紙本着色	170×210
12	鎌倉秀雄	《三像》	1988 (昭和 63)年	再興第 73 回院展	紙本着色	180×225.5

洋画 18 点

Ⅲ. 洋画作品

日本の洋画作品 130 点の中から、今回は 18 点をご紹介します。黄金色の空に照らされた母子に触手を伸ばすように黒い枝が伸びている清水聖策《聖母子》(作品No.14)は、画家が亡き母を偲んで、一心に母子像を描いていた時期の作品です。また、艶やかな孔雀と南国風景で知られる北久美子は、本作(作品No.15)が初めて美術館買い上げとなった作品で、「カラスの絵なんて、なんだか不吉な感じに思われていたので、なおさら嬉しかった」と述懐しています。

カラスを描いた山本真也《枯野》(作品No.11)ほか、鳥を描いた作品は何点も所蔵しており、「家の裏が自然教育園になっていて、しょっちゅう大きな鳥が飛んでくる。だから箱根に行っているよう。」と語っていた清次郎は、鳥に親しみを持っていたようです。

13	木村清敏	《雪》	1988 (昭和 63)年	第 73 回二科展	油彩・カンヴァス	112×162
14	清水聖策	《聖母子》	1985 (昭和 60)年	第 39 回二紀展	油彩・カンヴァス	131×162
15	北 久美子	《午後の視線》	1985 (昭和 60)年	第 39 回二紀展	油彩・カンヴァス	162.1×227.3

IV. 昭和 60 年のコレクションより

インドに魅せられ、その地に住む人々の力強さと生命力をテーマに長年取り組んでいる北村真（作品No.16）。北村は、清次郎が群馬県伊香保町で営んでいた旅館で催されたインド古典舞踊の会でたくさんのヒンズー彫刻（現在は展示室 3 に常設）を目にして以来、当館インド彫刻の熱心なファンでもあります。清水聖策と北村真は毎年新作を発表し、二紀展の重鎮として活躍しています。

16 北村 真 《砂の音 No.5》	1985 (昭和 60)年	第 39 回二紀展	油彩・カンヴァス	181.8×227.3
17 角 浩 《ベネチャ異変》	1985 (昭和 60)年	第 49 回新制作展	油彩・カンヴァス	162×130

展示室 6

V. 昭和 49 年から 54 年のコレクションより

展示室 6 では、1974（昭和 49）年から 10 年間にわたって蒐集された作品より 13 点をご紹介します。まずは、独立展や個展で活躍中の今井信吾が 36 歳の時に描いた《コンクリートボックス・内なる風景》（作品 No.18）をご覧ください。ほぼ半世紀前の作品ですが、すでに現在の今井作品に連なる躍動的な筆さばきが見られます。本作では、持ち味のカラフルな色彩を抑え、空間に舞う旗が勢いよくはためくさまに、「何物にも与くみしないというかたくなな情感をあらわした」といいます。本作発表の 2 年後に昭和会賞を受賞、文化庁派遣芸術家在外研修員に選出されました。一方、大学紛争の最中に横浜国立大学で教鞭をとっていた國領経郎は、集団的な行動をする傾向がありながら孤独な半面を持つ若者特有の心情を《若い群像》（作品 No.19）に映し出しました。ちなみに 1974～75 年は、80 歳の清次郎が当館の至宝 中国元時代の《青花双鳳草虫図八角瓶》と明時代の《青花龍唐草文天球瓶》を取得し、新橋田村町の自社ビル 7 階に美術館を開設した時期にあたります。様々な美術品に触れて磨いた感性をフル回転して、この 2 年間に院展、創画展、日展、独立展、一水会展、国展、新制作展、春陽展を廻り 31 点の絵画をコレクションしました。

18 今井信吾 《コンクリートボックス・内なる風景》	1974 (昭和 49)年	第 42 回独立展	アクリル絵具・カンヴァス	218×253.7
19 國領経郎 《若い群像》	1975 (昭和 50)年	第 7 回日展	油彩・カンヴァス	131×194
20 大國章夫 《時化る》	1978 (昭和 53)年	第 42 回新制作展	油彩・カンヴァス	130×162
21 成井 弘 《プエルト・バヌース風景》	1978 (昭和 53)年	第 32 回二紀展	油彩・カンヴァス	123×173
22 宇野 一 《丘の群居》	1979 (昭和 54)年	第 11 回日展	油彩・カンヴァス	130×163

VI. 昭和 54 年から 58 年のコレクションより

人生は山あり、谷あり。様々な事情を抱え、長らく画業に専念できなかった画家も少なくありません。また、本展の出品作家たちは、概ね明治末から昭和初期の生まれです。日露戦争、第一次世界大戦のあとに続く満州事変、支那事変、そして第二次世界大戦。画家たちは時代に翻弄されながらも、それぞれに絵画への志を形にしていたのでした。

幼少期から絵描きになりたかったという藤森兼明の少年期は富国強兵に突き進んだ時代でした。家族の理解のもと美術の道を歩み始めますが、大学卒業を前にして父が急逝し、貿易商社に就職。5年ほどアメリカへ赴任して多くの体験を重ね、神道の国に生まれた仏教徒でも「何かを信じる気持ちは変わらない」とカトリックの洗礼も受けたことがきっかけとなり、現在も「祈り」の表現を探し求めています。さて、藤森が画業に復帰して5年目の第11回日展出品作が、《エトルリア追想》(作品No.23)です。夏に取材旅行で訪れたエトルリアの壁画を背景に腰掛ける人物を配した作品で、本作は聖像壁画や中世装飾写本の前に女性座像を描く今日のスタイルの魁となりました。

23 藤森兼明 《エトルリア追想》	1979 (昭和 54)年	第 11 回日展	油彩・カンヴァス	162×131
24 平通武男 《レッスン》	1979 (昭和 54)年	第 11 回日展	油彩・カンヴァス	162×133
25 村田省蔵 《ヴェネチアの赤い館》	1982 (昭和 57)年	第 14 回日展	油彩・カンヴァス	163×131
26 坂本益夫 《オンフルール港》	1982 (昭和 57)年	第 36 回二紀展	油彩・カンヴァス	90×116
27 斎藤 求 《二人》	1983 (昭和 58)年	第 51 回独立展	油彩・カンヴァス	162×130

VII. 昭和 59 年のコレクションより

最後にご覧いただく3作品は、いずれも1984年に制作された爽やかな広がりのある風景画です。

田坂乾《ヴェネチア海辺》(作品No.28)では、そぞろ歩く人やたゆとう波の動きが水彩風のタッチで活写され、清次郎が後に取得することになるアルベール・マルケ(フランスの画家)の作品に共通する明るさと穏やかさがみられます。また、水辺の風景を好んで描いた石川滋彦は《教会の見える運河》(作品No.29)でも、緑あふれるアムステルダム都市景観を描いています。

日展や一水会で活躍する吉崎道治は今年90歳。彼が1984(昭和59)年に描いた《雪の終着駅》(作品No.30)の舞台は只見線会津塩沢駅で、雪に埋もれゆく線路やポイント、保線小屋をモチーフに、グレーに霞む雪景色をとらえました。取材日は雪が降りしきり、ビーチパラソルを立てたものの、吹き込んだ雪が画面に氷着し閉口したといいます。こうした困難な状況で描いた原画をもとに、優しい色づかいで、どこかメルヘンチックな詩情あふれる風景を描き出しました。

28 田坂 乾 《ヴェネチア海辺》	1984 (昭和 59)年	第 46 回一水会展	油彩・カンヴァス	64×119
29 石川滋彦 《教会の見える運河》	1984 (昭和 59)年	第 48 回新制作展	油彩・カンヴァス	80.3×116.7
30 吉崎道治 《雪の終着駅》	1984 (昭和 59)年	第 46 回一水会展	油彩・カンヴァス	97×162

今回は、およそ1970年代半ばから清次郎の最晩年にあたる1988年までにあつめられた昭和の日本画と洋画作品をご覧いただきました。ちなみに、清次郎は亡くなる前年の1988年に創画展、院展、新制作展、二科展、日展、二紀展に出掛け、14点をコレクションに加えています。こうした情熱を傾けて約15年の間に“当時の日本現代絵画”が300点近くも収蔵されたのでした。

今回ご紹介した制作者の想いや、作品にまつわるエピソードを清次郎が知ることはありませんでしたが、20代のころから培ってきた美意識が作品の発する力を受け止め、これらを選ぶに至ったのでしょう。

2023年6月に烏頭尾 精(作品No.2)は、随想録『飛ぶ鳥ものがたり』を刊行、2024年初頭から名都美術館で「鳥になった画家—烏頭尾精の世界—」が開催されるなど、91歳を迎え益々精力的な活動を展開しています。清次郎が他界して35年以上の歳月が流れた今、組織の中心で活躍し、後進の育成に努めつつ、なおも画家たちは熱い想いを胸に制作を続けています。